ウナメからみたウシの名前の成立について

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者名	松尾,雄二
発行元	養賢堂
巻/号	68巻9号
掲載ページ	p. 966-970
発行年月	2014年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

ウナメからみたウシの名前の成立について

松尾雄二*

1. はじめに

牛をなぜウシと呼ぶのか，契沖の大人説，新井白石のウ(韓地方言)・シ(宍)説及び松岡静雄等の大宍説などいくつかの説があり，さらに牛の渡来時期もよくわからない。

3世紀の『魏志倭人伝』には「その地(倭)には牛馬虎豹羊鵲無し」と記述されている。『事典人と動物の考古学』によれば，ウシ遺体(牛骨等)の最古の出土例は5世紀頃(奈良県御所市南郷遺跡)であり，ウシ型埴輪もこの頃から少ないながら出土する。

鋳方貞亮の『改訂日本古代家畜史』によれば，牛は朝鮮半島から3世紀後半から7世紀に渡来したという。ウシの名前成立などについて再検討を行った。

2. 上古及び辞書文献にあらわれる牛の名前

牛はいつからウシと呼ばれたかはわからない。名前成立を探るには上古文献の歴史的な読み(訓読み)，万葉仮名及び辞書などを調査し，基本的な牛の呼び名の概況を記す。

7～8世紀に成立したと思われる『古事記』の序に放牛息馬，景行天皇の条(以下，天皇の条を省略し『古事記』を「記」，『日本書紀』を「紀」とする)に其大如牛，仲哀記に牛婚，応神記に牛，安康記に牛甘とあり，すべて牛はウシと訓読みされている。『日本書紀』では神代紀の保食神の部分で牛馬，神武前紀に牛酒，垂仁紀に黄牛・牛，景行紀に牛馬，清寧紀に飼牧牛馬，安閑紀に牛，推古紀に白斑牛馬，皇極紀に殺牛馬，孝徳紀に牛馬，天武紀に牛の文字があり，多くはウシ，神武前紀のみが牛をシシと訓読みしている。牛をシシと読むことは注目される。しかしながら，万葉仮名で書かれていないため，必ずしもウシと呼ばれたという確証はない。

万葉仮名で書かれた『万葉集』1780(数字は国歌大観番号)で牡牛をコトヒウシ，3838で事負乃牛をコトヒノウシ，3886で牛をウシと訓読みしている。コトヒウシが三宅の枕詞となっているが，コトヒ牛が租米を屯倉(みやけ)に運ぶところから，地名の「みやけ(三宅)」にかかるという。つまり，枕詞では運搬の道具として使っているのである。大槻文彦の『新編大言海』によれば，「許多負牛(ココタオヒウシ)の約略」とされ，重い荷物を背負ったりしたようである。牡牛とは限らないが，コトヒには牡が多かったため，そう呼ばれたと思料される。

また，1520の牽牛(彦星)の歌の中でイナムシロを伊奈宇之呂と書き，牽く牛の意味でムシの代わりに宇之(ウシ)の字を意識的に入れており，万葉集ではウシと読んでいる。443の牛留鳥，2743の留牛馬及び2839の牛鳴についても戯書として扱われる。

さらに，『播磨国風土記』の塩阜(揖保郡)，塩村(宍禾郡)および『肥前国風土記』の値嘉郷(松浦郡)に牛の字があり，ウシと訓読みされたと推測される。

平安時代(10世紀)の源順の『倭名類聚抄』には牛の和名を宇之，牡牛(特牛)を古度比，黄牛を阿米宇之とし，ウシ，コトヒ，アメウシと読まれ，ウシと読まれている。これらのことから，ウシは万葉集(8世紀)以前から使われている。

『日葡辞書(土井ら訳)』(1603-4年)には牛をポルトガル式ローマ字で記録している。

「Vxi【牛】牡牛又は牝牛」「Cotoi【特牛】Boguiŭ, Cottoi」「Vo uji【牡牛】をうじ」「Vname, Mevji【牝牛】うなめ，めうじ，牝牛Meujiに同じ」「Bebenoco【子牛】べべノコ，牡または牝の子牛」さらに，「Ameuji【黄牛】，Acauji【赤牛】金茶色あるいは赤茶色の牡牛又は牝牛」「Riguiŭ【犁牛】Madara Vxi(斑牛)斑紋のある牛」とある。ここで，黄牛とあか牛が同じ(色の程度に差はあるかもしれない)であることがわかる。また，牛はあめ牛(あか牛)以外に斑牛がいたことが知られる。斑牛とはあかと白，黒と白(反対もある)などの斑紋であろうか。諸橋轍次の『大漢和辞典』では，特とはをす，犁はまだら牛の意味があるとされる。そして，日葡辞書では前に言葉がある場合は，ウシ vxi ではなくウジ uji と濁って

*長崎県立農業大学校畜産学科 (Yuji Matsuo)

0369-5247/14/¥500/1 論文/JCOPY

発音している。uji(vji)の使用例に Covji(子牛), Curumavji(車牛), Fanaqire vji(鼻切れ牛)などがある。現在はウシ, オ(ス)ウシ, メ(ス)ウシ, コウシと呼ぶ。

3. ウナメの解釈

日葡辞書の牛のオ・ウジとメ・ウジ(ベベノコを除く)はウシが成立してから作られているから，ウシの言葉から vxi, uji などの言葉をとり去ると，牡牛のコトイ，牝牛のウナメが残る。コトイは牡牝に関係(実際は牡牛)なく，2. の説明のとおり役牛などの用途をさし，駄牛・牽牛の意味である。そこで，残りのウナメ(「名語記」が初見か)に注目する。

ウナメ(ナメ，ウナミ及びオナメは関連・派生語)とは一体何なのだろうか。

結論から言うと，ウナメは牛の牝と解釈される。新井白石の『東雅』巻十八の畜獣の部に以下の記述があり，江戸時代にこのような伝承があったか，ウナメから白石が着想したものと思われる。

「牛　ウシ　義詳ならず。牛の如きも，太古の時に既に聞こえし事，馬の註に見えたり。これも其初に名づけ呼びし所は，今のいふ所の如くにはあらざりしを，後の代に至って，今の名の出来たりけむも知るべからず。牛をウといふ事は韓地の方言とこそ見えたり。今も朝鮮の方言，牛を呼ぶ事はウといふなり。」

この中に「牛をウといふ」とあり，牛はウである。牛をウという事例は，ウナメ以外に，大漢和辞典には名詞ではなく，「うくそ(牛九十，和爾雅)」や「うばり(牛尿，姓林全書)」などの人間の名前(姓氏)として存在するとされる。ナは中田ら編著の『古語大辞典』によれば，助詞「の」の意味があり，古い格助詞・連体助詞で上代語とされる。用例は非常に限られ，奈良時代でも既に用いられず，まなこ(目の子)，たなごころ(手の心)，みなもと(水の本)，みなと(水の戸)，みなつき(水の月)などの古い言葉の中にひっそりと残り，現在は独立した一つの言葉となっている。

源順の『倭名類聚抄』毛群に，ケモノ(倭名類聚抄では獣を介毛乃，畜を介太毛乃とする。牡・牝の以下の説明と異なる)の牝，牡について以下のとおり記載されている。「牝　説文云，牝 音膩，和名米計毛乃 畜母也」，「牡　説文云，牡 音母，和名乎介毛乃 畜父也」とされ，牝はメケモノとされ，メ(米)は牝である。したがって，ウ・ナ・メは牛の牝と解釈される。

これらの傍証として，ウナメと同じ用法で，「な」が現代的な助詞「の」に変化し『日本国語大辞典』で筑前・佐賀県の方言で牡牛をウノオと呼ぶとされる。これらは「ウ＋(の・な)＋○」の構造で表現される。

ウ＋(の・な)＋メ　　ウナメ　牝牛
ウ＋(の・な)＋オ(ヲ)　ウノオ　牡牛

また，原田章之進編著の『長崎県方言辞典』では牝牛をウシ(五島－新魚目・三井楽及び松浦市御厨)やウナメ(ナメ，ウナミなど)がある。それ以外に，関係する言葉と地理的条件から北部九州でのウシの名前成立の過程の痕跡を残していると類推すれば，「な」が助詞「の」に変化して，牝牛をウノ(壱岐・五島・松浦・島原ほか)，ウノオ(壱岐・松浦ほか)およびウノウシ(平戸ほか)などが採集されている。河東牧童こと寧直麿の『国牛十図』には御厨牛の解説として「肥前国宇野御厨貢牛を以て之を称す」とある。宇野御厨(松浦一帯・平戸・五島)の御厨とは中世日本においては皇室や伊勢神宮など有力な神社の荘園(神領)を意味している。牛が長崎方言ウノと解釈すれば，宇野御厨(ウノの御厨)は牛の荘園の意味となる。御厨牛が京への貢牛(『国牛十図』では筑紫牛に次いで2番目に記述，『駿牛絵詞』では筑紫牛に次いで2番目に多い)とされたことを考えると傍証と思われる。京への貢牛は牛車を牽くコトイかつウノオである。これらの傍証からも「動物名(イ・カ)＋(の・な)＋○」(イノコ，カノコなどの例)の構造だと考えられる。

4. ウシの「シ」は宍の意味

神武天皇が東征の途中，八咫烏に導かれて大和国菟田の血原に行き，兄猾，弟猾を征伐した。先に降伏した弟猾は神武らを大いに歓迎した。神武前紀戊午年八月乙未に，「巳にして，弟猾，大きに牛酒を設けて，皇師を労ぎ饗す。天皇，其の酒宍を以て軍卒に班ち賜ひ，乃ち御謡して曰はく。謡，此には宇多預瀰と云ふ。」の記事がある。

この「牛酒」は牛肉と酒の意味である。牛酒としては戦国策の斉策，史記の孟嘗君伝，武安侯伝及び司馬相如伝などにあり，戦国策には盛大な宴席とされる。また，後の文章で「酒宍」，酒と宍ということで，単なる飾り言葉ではなく牛肉と言うことが判る。

しかし，本居宣長の『古事記伝』（古事類苑より抜粋）ではこの記事に大いに反論する。

「「設牛酒（牛酒を設けて）」と書かれたるは，漢籍に倣える潤色の文なり。戎国にてこそ，かかる饗などにも牛肉を主とすれども，皇国にては，古も今もさらに無きことなり。天武天皇の御世に，牛馬肉を食うことを禁められしは，やや後に民間などにては食し者もありたらむ。上代にはさらにさることなし。たとえ，食し者は稀々ありしにもあれ，かかる大御饗などに用いしことは決して無きことなり。ゆめ虚文にな惑ひそ。」

国学者本居宣長は徹底して，この「牛酒」の記事を虚文と断定している。が，稀ではあるが，牛肉を食した者がいることを彼本人が自覚していたようである。

古くは，シシと読ませるものに万葉集 1292・2493・3344・3885 で字義どおり宍，1019 で肉，239・379・926・1804・3278 などで十六（九九算），239 で四時，3428・3531 で思之，3848 で子師，199・405・1262・3874 で鹿，478・3000・3848 で鹿猪とされ，本来の宍でない万葉仮名で表現される。歌の構成・内容によりシシは鹿の意味が多いが，鹿猪の場合もあり，校注者等により多少異なる。神代紀・垂仁紀の獣，斉明紀の肉をシシ，持統紀の酒宍をミキシシと訓じている。獣もシシと読まれるが，獣の宍のことで，「獣の」部分がカノシシ（鹿），イノシシ（猪）同様に，カノ・イノが省略されていると考えた方が合理的である。本来はシシと呼ぶ場合，猪，鹿および獣も猪の宍，鹿の宍および獣の宍として人が肉を食べる前提で呼ばれている可能性がある。多くの動物がシシと読まれ，牛もシシと表現される頃は牛肉は食べるものであったと思われる。さらに垂仁紀に都怒我阿羅斯等，応神記に新羅国王の子天之日矛（天日槍）らが，かの地で牛肉を食べる説話がある。そして天武紀四年四月庚寅の詔に「牛馬犬猨鶏之宍を食うこと莫れ」とあり，それまで獣肉が規制されず食べられていたようである。

神武前紀に牛酒（牛肉と酒），雄略紀に宍膾，その他に脯（乾肉），醢（肉醤）などの言葉があり，シシ及びシ（東雅ではシカ，ウシ，ヒツシの例）と訓読みする前提には肉食は上古よりなされていたと考えられる。

神武前紀で牛をシシと訓読みすることから，東雅で羚羊をカマシシと言うように，8 世紀以前にも牛を，牛の宍の意味で「○○シシ」と呼ばれている可能性がある。

シシは新井白石の東雅巻十八では，「我国いにしへ凡獣をばシシと云ひけり。日本紀に獣の字読をシシといふ。即是也。其肉の食ふべきをや云ひぬらん。牛をウシといひ，鹿をシカと云ひ，羚羊をカマシシといひ，羊をヒツシといふが如き，皆これ其肉の食ふべくして，また角生ふる者共なり。必その故ありぬべけれど，今は其義は隠れぬ。東国の俗には，牛をタシといふなり。タシとは田鹿なり」とあり，柳田国男の『海南小記』では田の宍としてタジシ（タシシ）と言い，大槻文彦の『新編大言海』，『標準引き日本方言辞典』及び『長崎県方言辞典』にも牛肉や牛をタジシ（タシ）と採集されている。

タジシ（牛肉）を例にとり，語の形態的な類似性から推定（日本語学的には資料や証拠が少なく証明できない）した。

東雅のタジシもタシも漢字の表現の違いで，同じ言葉（牛肉の意味）と考えられる。なお，安土桃山時代の日葡辞書には xixi：宍＝nicu：肉とされ，Guiũnicu：牛肉はあるが，Taxi，Taxixi などがないことから，この言葉は江戸時代以降に使用されはじめ，東雅（1719 年）までの短い間に，田の宍→タジシ（タシシ）→タシと変化してそのまま定着した可能性がある。

新井白石や柳田国男が論じるように牛でも宍：xixi が関連する可能性は大きく，したがって，ウシもウナメ同様に「ウ＋の（な）＋○」で構成され，牛の宍の意味でウノシシ（あるいはウナシシ）が最初で，「の（な）」が省略されウシシ（類推語），そして，シが省略され詰まってウシになったと想像される。その例を鹿と猪についても参考に表 1 に付す。鹿は古語でカノシシ（カの宍）とされる。日葡辞書ではシカを表現するのにカノシシ：Canoxixi，カシシ：Caxixi（方言にもある），シカ：Xica などと表現される。イノシシ（ヰの宍）は古形のまま使用されて現在に至っている。

したがって，ウシは田の宍のタシの最終段階に相当する。牛の古代動物名はウの可能性が示唆される。ただし，日本語学的な証明は資料が少なく困難であることを付け加える。

なお，最初にウノシシ説を提唱したのが鋳方貞亮の『改訂日本古代家畜史』である。彼は新井白石の

表1　語の形態的な類似性から作成した整理表

	原　義	シの省略	「の(な)」の省略	シの省略	転　倒
牛肉	田の宍	―	タジシ・タシシ	タシ	―
牛	(ウの(な)宍)	―	(ウシシ)	ウシ	―
鹿	カの宍	〈カノシ〉	カシシ	(カシ)	シカ
猪	キの宍	〈キノシ〉	―	―	―

注：表中の(　)は類推語。その他は文献，方言等に存在。
〈　〉は鋳方説によるもの。

後継者で，イノシシ，カノシシの形態的な類似性から考えたようである。

「ウの転化と観る場合，ウの宍が縮まりウシとなつたと推察することが可能である。とは云へ，ウノシシと訓む方がより適切であらうことは，例へば猪をキノシシ又は(キノシ)，鹿をカノシシ(又はカノシ)と訓む慣習あることによつて容易に想像せられるところである。(中略)今，これを以て牛を論ずれば，必ずしも，ウウシシ(又はウシシ)と訓む必要は無く，ウシシ又はウシと称呼したと考ふることも亦，決して牽強の論であるとして非難すべきでは無いであらう。言語習慣としてその例を観ることができるからである。」

5．牛の増殖・定着時期はいつか

牛は弥生時代渡来説があるが，その時代のウシ遺体(牛骨)など明確な証拠はない。また，牛を朝鮮の方言でウという新井白石の立証は難しいが，ウナメ・ウノオなどの方言の分布状況などから，朝鮮半島から対馬，壱岐，九州本土到達時点で，牛をウと呼んだか，ウシ関係の名前が成立した可能性がある。ウナメは上代語と考えられることから，ナの使用例は奈良時代(8世紀)以前で，この言葉は日本(倭)への牛の渡来・定着時期に近接する可能性がある。

3世紀末の魏志倭人伝では倭に「牛馬なし」との記述(少数はいたかもしれない)があり，牛の定着がウシ遺体とウシ型埴輪の出土状況から，5世紀までに奈良に到達・増殖し，記紀，万葉集や8世紀の肥前国風土記の「馬牛に富めり」の記述を信じれば，この間五百年で急激に牛頭数が増加しているようである。牛が増殖するためには，個人が導入する牛1頭，2頭ではなく，若い牡牛，牝牛が大量にいないと増殖が難しい。

ウシ遺体から，奈良到達を判断すると，牛の増殖・定着は4世紀からウシ遺体のある5世紀までの200年くらいに限定される。この200年間に牛が朝鮮半島から大量に渡来し，定着・増殖したと思われる。この点で鋳方貞亮説と一致する。倭に何が起こったのであろうか。そこで，朝鮮半島の新羅と倭の関係(牛記事を含む)記事を記す。

『三国史記』第十五代新羅国王の基臨尼師今の三(300)年倭国と国使交換。第十六代の訖解尼師今の三(312)年倭国王の王子に新羅からの花嫁を求める，三十五(344)年倭国が新羅からの花嫁を求める(新羅辞退)，三十六(345)年倭国が国交断絶，三十七(346)年倭軍が襲い金城を包囲。第十七代の奈勿尼師今の九(364)年倭兵が大挙侵入，三十八(393)年倭軍が侵入し(舟を捨て)金城を包囲。第十八代の実聖尼師今の元(402)年倭国と国交，奈勿王の王子未斯欣を人質とする，四(405)年倭兵が侵入し明活城攻撃，六(407)年倭人東部辺境に侵入，南部辺境にも侵入，十四(415)年倭人と風島で戦う。第十九代の訥祇麻立干の二(418)年未斯欣が倭国より逃げ帰る，十五(431)年倭兵が侵入し明活城攻撃，(二十二(438)年，教民牛車法：国民に牛や車の扱い方を教えた)，二十四(440)年倭人南部・東部辺境に侵入，二十八(444)年倭兵が金城を包囲。第二十代の慈悲麻立干の二(459)年倭人が兵船百余艘を連ねて襲撃し月城を包囲，五(462)年倭人が襲来し活開城を攻撃，六(463)年倭人が攻撃，十九(476)年倭人が東部国境に侵入，二十(476)年倭人の軍隊が五道を通って侵入。二十一代の炤知麻立干の四(482)年倭人が辺境に侵入，八(486)年倭人が国境地帯に侵入，十九(497)年倭人が辺境侵入，二十二(500)年倭人が長峯鎮を攻撃。(第二十二代の智證麻立干の三(502)年，始用牛耕：はじめて牛を耕作に利用。)なお，百済との交渉記事もある。

神功紀などに新羅征討の記事があり，人質の未斯欣は神功紀摂政五年に新羅に逃げた微叱(許智)旱岐あるいは微叱己知波珍干岐とされる。また，高句麗国の好太王(広開土王)碑文中に記載のある「辛卯(391)年」もこの期間中に入り，朝鮮半島との交渉・交流があったと思われる。なお，『宋書倭国伝』の倭国王讃珍済興武の時代にもあたり，倭王武の上表文には「道百済を遙て，船舫を装治す」とある。

魏志倭人伝では，対馬国では「船に乗りて南北に市糴す」，一大(壱岐)国でも「南北に市糴す」とあり，三国史記にも倭軍は舟を捨て，倭人が兵船百余艘を連ねてとあり，牛が朝鮮半島から対馬，壱岐を

経て，九州を含む本土まで船で運ばれ，牛馬が多数導入された可能性が示唆され，この時期に倭における牛の導入・定着，その後の増殖が考えられる。この時，牛馬と共にその利用技術(馬具・副葬品などがこの時期に急増する)をも倭にもたらした可能性がある。しかし，これも直接的な証拠ではなく，あくまで状況証拠であり，この時期にウシ関連の言葉が成立したかどうかは立証できない。

6. ウシの名称に関連する問題点

牛をウとした場合，ウシのシが省略されてウになった可能性があるが，ウそのものの意味はよくわからない。その他に，(1)～(3)の問題が発生する。

(1) 牛の語源である大宍説

松岡静雄及び大槻文彦説では牛の語源は「大宍」とあり，有力である。これは「大」きな「宍 xixi(肉 nicu)」の意味である。そして大宍のオオシシから詰まってウシに変化したとされる。大宍には大槻文彦説が有効である。大をウと読むことは大槻文彦の『新編大言海』に，「う　おほ(お)ノ約レル語，大」と解説する。例として，おほみ(大水)→うみ(海)，おほし→うし(大人)，おほま(大ま)→うま(「ま」は馬，こまは子馬・小馬(駒)。『倭名類聚抄』には駒は「古萬，馬子也」)，おほしし(大宍)→うし(牛)などがある。大槻説で牛の場合は，おほしし→うしし(あるいはおほし)→うしと変化したと考えられる。

大宍の課題は，ウマのウと同じくウシのウを大とする判断が困難で，それでは小宍とは何か，なぜ，大宍が馬ではなく牛なのか，そもそも大とは何なのかなど更なる課題が存在する。

(2) 動物名ウの乱立，混乱

角のある大動物ウ≒牛V，耳の長い飛び跳ねる小動物ウ＝兎V，水に潜る黒い鳥ウ＝鵜Vである。これらが同時代にウと呼ばれていたかは判断できないが，存在する場合に混乱すると思われる。しかし，いずれの時か牛はウ<シ>Vxi となり，兎はウ<サギ>Vsagui と呼ばれて区別されている。それによりウの乱立は解消されている。一音で多くの動物などが呼ばれていた可能性がある。

なお，ウサギは十二支の卯に兎をあてることから兎も定説どおり上古動物名ウである。鵜については万葉集359で宇，943で水鳥，3330で鵜などとあり，現在でもウと呼ばれている。

(3) 字義ではない，言葉の混乱

長崎方言で牝牛をウノオと呼び，牡牝が逆になっている。さらに，『日本国語大辞典』では方言でウナを牡のシカ(長野県飯田市)，ウナを牝のイノシシ(愛知県北設楽郡)。ウノオ(ウノヲ)を牡のイノシシ(四国)とするが，本来の意味ではない。方言では牛と鹿，猪が混同するように本来の意味が忘れられ，多くの言葉で表現されるが，その意味の痕跡をある程度残しているように思われる。

7. おわりに

ここにいくつかの仮説を示したが，本稿は全体を新井白石の『東雅』からまとめたもので，推測の域を出ないものである。ウナメから発展し，鋳方貞亮説を補強しているが，ウシの語源の証明とはなっていない。動物名の語源は曖昧で不明確，あるいは文献的証拠が少ないこともあり，現状では，ウシ語源はいくつか説明はなされても証明できない。

引用文献，参考資料等

魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝，和田清・石原道博編訳，岩波書店
三国史記(東洋文庫)，金富軾，井上秀雄訳注，平凡社
日本書紀，坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注，岩波書店
古事記，倉野憲司校注，岩波書店
万葉集全訳注原文付(講談社文庫)，中西進訳注，講談社
風土記(日本古典文学大系)，秋本吉郎校注，岩波書店
源順，倭名類従抄，国立国会図書館，デジタル化資料，http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2606770
邦訳日葡辞書，土井忠生・森田武・長南実訳，岩波書店
新井白石，東雅，国立国会図書館，近代デジタルライブラリー，http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993108
群書類従「国牛十図」・「駿牛絵詞」，塙保己一，続群書類従完成会，平文社
古事類苑，「古事記伝」，皇典講究所・國學院・神宮司庁，吉川弘文館
大漢和辞典，諸橋轍次，大修館書店
新編大言海，大槻文彦，冨山房
日本国語大辞典，日本国語大辞典第二版編集委員会外，小学館
古語大辞典，中田祝夫・和田利政・北原保雄，小学館
柳田国男，定本柳田国男集「海南小記」，筑摩書房
事典人と動物の考古学，西本豊弘・新美倫子編，吉川弘文館
鋳方貞亮，改訂日本古代家畜史，有明書房
標準引き日本方言辞典，佐藤亮一監修，小学館
長崎県方言辞典，原田章之進編著者，風間書房
松尾雄二，文献にみる長崎の江戸時代初期以前の牛肉食について，畜産の研究;67(2)，養賢堂
松尾雄二，文献にみる長崎の江戸時代の牛肉食について，畜産の研究;67(3)，養賢堂
松尾雄二，文献にみる長崎の江戸時代のと畜について，畜産の研究;67(5)，養賢堂
松尾雄二，文献にみる牛肉料理について，畜産の研究;67(9)，養賢堂
松尾雄二，文献にみる長崎を中心とした古代からの牧について，畜産の研究;67(12)，養賢堂